

を使うといった言葉使いも共通していて、そのような状況がマレーシアにも入ってきています。それを「かっこいい」と見るかどうかは別として、「乗っかってみたい」と思う若者や人びとは確実にいて、そのような傾向が徐々に言論のスペースを拡げていきます。

1990年代のレフォルマシのときには、「マハティールを批判してもいいのだ」という認識が共有されることで言論に関する一つの堰が壊れました。今日の話にもありましたが、最近の選挙では「華人が街頭に出てデモをしてもいいのだ」という状況が生まれ、それが常態化するかたちで徐々にタブーが解かれていく現象が起こっているようです。インターナショナルな民主化モデルをベースにしながら、マレーシアでもこのような現象が確実に広がってきたということです。簡単に一般論化していいとは思いますが、そういう意味で、マレーシア特有の個別的な現象とはいえない、民主化のグローバル化の一側面といえるのではないのでしょうか。

ただし、かといって、フェイス・トゥ・フェイスでさまざまなエスニック・グループの人たちが顔を合わせたときの態度も変わりつつあるかということ、そのところは未だ疑問の余地が残ります。私は最近あまり長くマレーシアに住んだり見たりしていないのでわからないのですが、この10年ぐらいを見て、たとえば大学のキャンパスでいろいろなエスニック・グループのメンバーがテーブルを同じくしてわいわい政治の話をするようになってくるまで変わってきたのかどうか、どなたかにお聞きしたいと思います。バーチャルな空間では確かにそのような傾向が進んでいるだろうと思います。英語を媒介にして「同じようなことを考えている連中がいる」と発見することはあると思いますが、生身のリアルな空間でも、さまざまなレベルで実際の意見交換が拡大しているのかどうか、そのあたりはどなたかに教えていただきたいと思います。

ディスカッション

山本博之(司会)これから討論に入りますが、私が最初にあげた三つの論点について鳥居さんと金子さんからご意見をいただきましたので、まずそれについて私から応答してからみなさんに議論していただきたいと思います。

■ 二大政党制の定着は難しく 今後のマレーシア政治は州ごとの分析が必須

山本 一つは、二大政党制は定着するかという話です。今日の議論を伺って、マレーシアは二大政党制が定着する方向に向かってはいないという印象を強めました。政権交代の可能性はあるとしても、安定した二つのグループがずっと維持される対抗軸が見つかからないだろうということです。

そうすると、華人の代表を政府に加えるという話が出ていましたが、BNとはかたちは違うけれど包括的な与党連合を作らざるをえないということかと思えます。現在のBNは民族別の代表が集まる「バリサン・ナショナル」ですが、それとは違う代表を含めて、たとえば「バリサン・マレーシア」という別の名前をつけるという道があるのかもしれないと思いました。

二つ目は連邦制の話です。半島部の州の権限が限定的であるかどうかについては鳥居高さんとお見解が噛み合わないところがあるかもしれませんが、ここで私が議論したかったのは、半島部の州に権限があるかどうかではなく、今後のマレーシア政治は州別に分析する方向を強めなければいけないのではないかと思います。

たとえば「この州とこの州の代表が連邦の与党で、あの州とあの州の代表が野党」という語り方がされるようになるかということです。PRを見ても、連邦全体では三つの政党が連携していると語られますが、州別に見ると、この州はDAPの州、あの州はPASの州と見て、それらの州が連携したものを全体でPRと見ることでもできるのではないかと思います。そうすれば、路線が大きく異なる野党どうしが連邦レベルで連携する道が開けるかもしれません。これは中村正志さんが最初に言った「今回の選挙を通じて研究者の枠組みを見直さないといけない」という発言にも通じると思っています。

■ 言葉の違いも居住地の違いも超えて 政治文化を変えるネット・メディアの可能性

山本 三つめの政治文化に関しては、金子芳樹さんから、「インターネットのメディアだと、言葉の違いをつなげるような働きをするかもしれない」というコメントをいただきました。たしかにそうだろうと思います。そしてさらに考えを膨らませるならば、インターネットのメディアは、言葉の違いだけでなく居住地の違いも超えて人々をつなげるかもしれないと思います。

そう考えると、華人に限りませんが、マレーシアの外にいて、あるいはマレーシア国内の別の地域に住んでいて、フェイスブックなどを通じて連帯して盛り上がる人たちの姿が見えてくる気がします。今回の選挙では国外在住のマレーシア人の間で帰国して投票しようという動きもあったようなので、その様子についてももしどなたかご存じだったらうかがってみたいと思います。

■ MCAはどこに向かうのか ——オルタナティブ・メディア重視へのシフト

山本 はじめにあげた三つの論点についての私からの応答は以上ですが、これに加えて、今日の議論を聞いていてこの場でどなたかにご意見をうかがいたいと思ったことがあります。PRのうちDAPとPASの話はたくさん出てきましたが、PKRについての話はほとんど出ませんでした。

「もし今回の選挙でPRが勝ったらアンワル・イブラヒムが首相になった」と言われるほどPKRはPRで重要な位置を占めていたにもかかわらず、選挙後に「PASやDAPはBNとなんらかのかたちで一緒になるかもしれない」という話は出てきても、PKRがそうなるという話は聞こえてきません。PKRはいったいどこに行ってしまうのでしょうか。別の言い方をすれば、「アンワル・イブラヒムが今後の5年間を考えたときの次の一手はなにか」という質問です。これについてもどなたかにご意見をうかがえたらと思います。

舩谷鋭 マレーシアの華人が私のインフォーマントで、そのなかに政治家をしているケースがありますので、この間に個別に連絡をもらったりして情報が入ってきています。

私がもっとも親しかった人は今回の選挙で落ちてしまいました。対抗馬も私が知っている人でした。落ちた人は高等教育省副大臣だったのですが、年配の人たちは、海外大学や国内の私立大学の資格の認可と

いった部分などのいろいろな 이슈をあげて、「彼はとりあえずちゃんと業績は残した。彼に対してノーという要素はない」と言っていました。12月ぐらいに選挙の日程が決まる前もそう言われていたし、日程が決まったあとはさらにはっきり言われていたので、「まあだいじょうぶかな」と思って見ていたのですが、ペナンにいたDAPの若い華人、じつはその人の元教え子ですが、それを対抗馬に当てられて、みごとに負けてしまいました。

華人枠がどうなっていくかということですが、ポール・ロウ (Paul Low Keng Swan) 首相府相を上院議員からあてると言われています。華人の代表と言えば、第一副教育相のメアリー・ヤップ (Mary Yap Kain Ching) も華人です。では、MCAはどうするかというと、ヒシャムディン・フセイン (Hishammuddin Hussein) が防衛相と兼務している運輸省のポストは、MCAの調整が終わりしだい与えるということです。

では、MCAがなぜ既存の二閣僚ポストを辞退したのか。個人的なやりとりのなかで私が感じているのは、UMNO支持のマレー人への気がねです。華人は人口的にも3割を切っています。議席で言うと、先ほどのデータで国会の総議席の6%です。そのようななかで、あえて1議席なり2議席なりの閣僚ポストを慣習に従って華人に与えることは、ナジブの責任問題にもつながります。ですから、トカゲの尻尾切りという側面もあったのではないかと思います。

お昼休みに伊賀司さんと話していて、MCAがチュア・ソイレック総裁の後任をどうするのかを考えていました。もともと「なぜこの人が党首なんだろう」という人ではありましたが、若い世代がいるのかと見た場合に、MCAは人材が豊かではありません。一方でDAPはわりあい若いところがあります。先ほどの篠崎さんと山本さんの話にあったように、MCAとDAPの党レベルの連携は難しいと思うのですが、個人レベルの切り崩しはやりかねないと思います。

DAPの華人とMCAの華人がともに天を戴かないかということ、会議に同席して話をしていることもありますし、「あの人はぼくの先生ですよ」と言ってDAPの人がMCAの人のことについてニコニコ笑いながら話をしたりすることはあります。すくなくともマハティールとアンワルのような関係ではないと思うので、可能性としては連携はありえます。いきなりDAPから入れた人をMCAの党首にすることはないと思いますし、いまからMCAに入ってくれる有能な

人がどのくらいいるかわかりませんが、世代交代を考えた場合、そういう手もあると思います。

MCAの大臣級の人は、選挙中はソーシャル・メディア利用に慎重で、自分ではぜんぜんフェイスブックに書き込んでいない人もいたのですが、先ほど見てみたら、落ちた人たちがさっそくフェイスブックに投稿しています。本人もそうしたかったのだと思います。ですから、このあとネット・メディア利用は刷新されていくと思います。2008年のときもBN全体で「オルタナティブ・メディアを舐めすぎた」という論調があったと思いますが、MCAはあまりそういう取り組みをしていませんでした。ひょっとするとこのあとそういうことをしていくのかもしれませんが、ただし、遅きに失した感があるとは思います。

■「レフォルマシ」世代の政治家が経験を積み 野党間で妥協に基づく連携を実現している

伊賀司 金子先生が野党間の連携はできていないのではないかとおっしゃいましたが、私は違う意見をもっています。たとえばマニフェストを書くときにも、あるいは州政権の運営をするときでも、いわゆる「レフォルマシ世代」の人たちがかなり入ってきています。この人たちと話をすると、共通な政治経験があって、野党間で妥協ができる有力な政治家に育っているという実感がとてもあります。

たとえばDAPでは、先ほど舂谷先生がおっしゃったMCAの候補者に勝ったリュウ・チントン(Liew Chin Tong)や、PKRのラフィジ・ラムリ(Rafizi Ramli)というナショナル・フィードロット(National Feedlot)事件で牛を数えた人など、実際の実務もかなりこなせる人が野党間の連携の場面で政治をまわしている場面を見る機会が多くなっています。そうした人たちは自分たちを「レフォルマシ世代」と認識しています。

この5年間で政治経験を積んで、この世代の特有の経験もあるため、野党間でかなり妥協できるかたちで連携が進んでいると私は思っています。

■新経済政策がもたらした構造の変化に対する PASの効果的な対応とUMNOの失敗

塩崎悠輝 鳥居先生の経済構造の変化の話は、マレーシアの有権者全体の変化の話でもあります。政党内について見ても、新経済政策で起こった経済構造の変化は民族を問わずどの政党ももろに影響を受けています。

私の発表では「PASのトランスフォーメーション」と書きました。「トランスフォーメーション」はナジブ

首相が大好きな言葉ですが、変化にもっともよく対応できたのはたぶんPASです。すくなくともUMNOに比べたら対応できています。ポンドックや宗教学校ベースの政党のままであれば、PASは1980年代に消滅していたはずですが、マレーシアの高等教育を受けた中間層を都市部で取り込んでいって、その競争でUMNOに勝った、少なくともUMNOに遜色がなかったことが、PASが今日まで存続して組織を拡大している要因です。

PASの青年部はUMNOの青年部よりもはるかに活発で、自発的に動きます。ただ、若い世代どうしが仲良くなりやすいという意味では、UMNOの青年部とPASの青年部は、他民族の若い世代と仲良くなる以上に、かつてないほど互いに接近しています。これは、公教育等のイスラーム化がマレー人全体に影響をおよぼしたこととも関係しています。このことが、おそらく両党の今後の関係を大きく左右します。

UMNOは大きな失敗をしていると思います。新経済政策はUMNOの存在意義であるかのようになっていますが、自分たちが進めた新経済政策の結果、優秀な人間がUMNOにぜんぜん入ってこなくて、選挙でも党組織の動きがかなり悪くなっています。

とくに青年部とブトリ(女子部)が低迷しています。お金を出さないとともに選挙運動もしません。おかしなヤング・エグゼクティブ志望のような若い人が来るけれど、お金をもらわないと動かないという人が多くて、そういう意味でUMNOは相当な危機意識をもっていると思います。

ナジブも、そのあたりは半ば見切りをつけているところもあります。UMNOはだめですが、BNとして直接有権者に働きかけて支持層を固めておきたいと考えていると思います。今回初めてBN直属の候補を立てたのですが、Perkasa副総裁のズルキフリ・ノルディンのような人しかいませんでした。ほんとうはPASの前副総裁のナシャルディンを立てたかったけれど、たぶん断られたのだと思います。おそらくBNとして民族を問わず有権者を直接的にある程度組織化して支持基盤化したいのだと思います。

■アンワル・イブラヒムの次の一手は

——影響力低下は明白だがUMNO加入はない

塩崎 PKRの今後ですが、PRは明らかにアンワルでもっていて、PKRでもPASの最高指導部に口をきけるのはアンワルだけです。PKRもアンワルでもっている政党です。まだ死にそうにはないと思いますが、

次の一手をどうするかというと、前回の選挙では金でサバ州とサラワク州の議員を買おうとしましたが、そういうことはもうしないと思います。本人も影響力がなくなっていることは自覚したと思います。

それでは、おとなしく地道に努力を重ねるかと言っても、UMNOに入ることはできないと思います。これは個人の確執みたいな話だと思いますが、もと子飼いの一部の人を除けば、アンワルはUMNOの人たちから大罪人だと思われています。UMNOの党組織はグダグダですが、案外割れないと私は思っています。

■ 経済成長の鈍化と国境問題、資本・頭脳流出……経済問題の未解決を示す選挙結果

横山久 私はエコノミストなので経済成長についてお聞きします。マレーシアでこれまでなんとか国がもってきたのは経済成長してきたからだと思います。ところが、先日の朝日新聞か日本経済新聞だったかで、マレーシアの選挙の結果を見て、「韓国、台湾に一人あたり所得で大きく水を開けられてしまった」と書かれていて、「1980年代には同じくらいの水準だったにもかかわらず、変わってしまったのはなぜかを考えなくてはならないという大きな課題を課せられた」という書き方をしていました。先ほど伊賀さんが新しい世代がどのような社会をつくっていくかと言われましたが、経済的な基盤があってこそ対話が成立するわけで、その意味ではすごく大きな課題を与えられたのではないかと心配しています。

もう一つ心配していることがあります。先ほど鳥居さんが言われた首都圏どうしのメガロポリスのような大きな流れの正反対に、山本博之さんや他のメディアも心配していますが、中国とのあいだ、フィリピンとのあいだ、あるいは南タイと北マレーシアとのあいだの国境の問題があります。あるいはミャンマーやインドネシアの人びとがマレーシア国内にこれだけたくさんやってきたとなると、ひょっとすると大きな新しい社会問題が発生するのではないだろうか心配しています。

水野広祐 横山先生のお話とも対応して重要な問題があります。大きく出されている問題としてはブレイン・ドレイン、頭脳流出の問題があります。

それから、経済的には明らかに出てくることですが、大きな貯蓄の過多、あるいは資本の流出という問題があります。そのもとには華人の不満があって、それで頭脳流出あるいは資本の海外への流出、国内投資の過小という話があると思います。

そう考えると、今回の選挙結果はマレーシア経済が直面する問題を解決しなかったことを示しているという印象があります。

■ 経済や生活などの切実な問題から政治が遊離し不正に抗議することが自己目的化している

中村正志 私は最初に、「この選挙でなにかが変わった気がするけれど、なにがどう変わったのかうまく整理できないでいる」と言いました。今日一日みなさんの話を聞いたあとでも、そもそもなにが重要だったのかますますわからなくなったという感じがあります。それは、経済とか生活とか、切実な問題から政治が遊離していつているという印象があるからです。

この選挙の結果を受けて、すぐに国民の生活が大きく左右されることはないと思います。マレーシアの経済はかなり変化していて、製造業はもう頭打ちで生産額が下がってきています。どこもそうですが、経済のサービス化がどんどん進んでいます。産業が多角化したと肯定的に捉えることもできるのかもしれませんが、なにが成長のエンジンなのかよくわからなくなっています。

そうしたなかで、製造業もサービス業も外国人労働者に頼っています。すごく意地悪な言い方をすると、生産活動から切り離された都市空間のなかで、経済的にゆとりのある善人気取りの人々が、精神的な満足感を求めて運動をしているような、そういう印象を受けています。

今回の選挙でここまでの展開を見ていてもっとも緊張したのは、アンワルが選挙後に選挙不正への抗議集会を呼びかけたときです。これは、制度改革を求めるブルシの集会とはまったく意味合いがちがうはずです。選挙が不正だったからBN政権に正統性はないと言ったわけです。

ならば論理的には、不当な政権を打倒しなければならないという主張につながるはずです。ところが結局は、おとなしくスタジアムに集まって終わりました。あれで、彼らには革命をする気はまったくないことがよくわかりました。現政権に正統性がないと言いながら、現政権を倒そうとは言わない。ようは、「政府はけしからん」と言うこと自体が自己目的化している。その部分ばかり肥大化しているのが現在のマレーシア政治だという印象を受けています。

景気はそんなに悪くはないわけです。良くもないけど、悪くもない。ですから、フィリピンやインドネシアで革命になったときのような、「こいつらを倒さな

ければ、我々の生活がおかしくなってしまう」という切迫感はぜんぜんありません。私は外国人の観察者にすぎませんし、革命を目指すべきだと主張するつもりはありません。しかし、この現象のいったいなにが重要なかがいまいちわからないのです。

マレーシア・オタクとしてなにかを語ることはできます。しかし、マレーシア自体にあまり関心がない方と話をしていると、すぐに話題が尽きてしまいます。ディテールに関心がない人にとっては、「政権交代しなかったの。なら、たいした事件じゃないね」という感じになってしまいます。

なにが言いたいのかというと、結局、先ほどのひどい一言に尽きるのかな。かつての選挙では、1980年代から1990年代くらいまでは、開発の方針をどうするかというのが一つの争点になっていたと思うのですが、それが2000年代になって薄れてきたという印象があります。

加藤剛 選挙キャンペーンで「民主化」という言葉をほとんど使わなかったのですか。ようするに「既存のルールがちゃんと運営されていないから、仕方をちょっと変えましょう」と言っている。この間のキャンペーンでは、韓国やインドネシアで民主化が起こったような大変革を求めたところがどこもなかったのかなという印象を強く受けました。

■ どのようなことも起こりうる危うさと 不確実性の高まり

西芳実 生活の切実なところとぜんぜん関係のないところで、ある意味で言葉だけで清く正しくやっているという中村先生のご発言がありましたが、そうだとしたら、だからこそなのですが、今回の選挙結果がなぜこうなったかを考えたときに、「チャイニーズ津波」といったり「華人が民族主義的に動いたからだ」といったりして、「民族的な亀裂をことさらに言い立てていい」という雰囲気が盛り上がってしまっていて、無責任なかたちで衝突がポッと出てきてしまうというように変わったという考え方はありませんか。

中村 私は、このあと政治がほんとうに重要になるとしたら、それは悪いこととしてだろうと思っています。それは西さんのおっしゃるようなことです。

政治の見方に関しては、塩崎さんがおっしゃっているような徹底したリアリズムに私自身は親近感を持っています。一方で、とくにインターネット上に回る言説には、「こうであって欲しい」という期待と「こうだろう」という推測がないまぜになったものがたくさんあります。でも、それもまた一つの現実です。

塩崎さんは「PASにリベラルな人とコンサーバティブな人がいるのではない。イスラム国家建設という目的は一つで、そこにいたる道筋に関する考え方が違うだけだ」とおっしゃいましたが、そう思っていない華人もたくさんいるはずですよ。「善いPASの人が出てきた」と考えている人もたくさんいると思います。それは間違っているかもしれないけれど、そうだと思います。いる人がいることもまた現実なのです。

だから、将来その思い込みが利用されることもあり得ないことではないでしょう。いまのPASは「善い」政党だと思い、「世の中を善くしよう」と思った華人がPASに投票する。その結果、PASとUMNOが組んでプミプトラ連合の政府ができるという展開もありえない話ではないと思います。実際に「自社さ」政権のような摩訶不思議な連立政権ができあがることもあるのですから。

いまは、どのようなことも起こりうるという危うさがあるように思います。ただし、あまりよろしくない事態が起こるかもしれないけれど、まったくなにも起こらないかもしれない。いまの時点では確かなことはなにも言えませんが、少なくとも、以前に比べて不確実性が高まっているとは言えるでしょう。

＊

山本 主要な論点が出てここから議論が盛り上がっていきそうな気配ですが、残念ながら時間となってしまいましたので、この研究会の議論はここまでとさせていただきます、これ以降はそれぞれの持ち場で議論を深めていただければと思います。今日はみなさんどうもありがとうございました。